

「身体の近代史」

大濱 徹也

一 近代 文明と進歩の相

日本人の相貌

開国後に来日した外国人が眼にした日本と日本人の姿はイギリス人イザベラ・バードの『日本奥地紀行』にその一端を読み取ることができます。

バードは、日本のあとに朝鮮にも行っておりですが、日本旅行記を「奥地紀行」として認めていますように、都市、東京だとか京都ではなくて、日本の奥地に強い関心があり、東北日本から北海道にかけて旅行をしました。

開港後の日本に外国人が盛んに来るのは、産業革命によってヨーロッパが失った世界、自然が破壊され、人間のよき姿が失われた状況下、失った世界が未だ息づいている世界の理想を当初地中海世界に求めましたが、その地中海世界もまた都市文明に冒されてきたというので、ヨーロッパの眼が未開のオリエント向けられます。そのような時に、「神秘の帳とばり」に閉ざされていた日本が開国しました。「神秘の国」がやっと開かれたことで、日本にこそヨーロッパ世界が失ったアルカディア、桃源郷があるのだとみなされ、ヨーロッパの近代が失った心を問ひ質そうとの思いにかられ、ヨーロッパから遠き極東の島国日本を訪れてきた。その旅は、欧米風の文明に侵された開港場や都市ではなく、未開の地たる田園が広がる田舎の風景、日本の奥地がめざされます。

イザベラ・バードもそういう中の一人で、一八七八（明治一）年に来

日、上陸したときの最初の印象が「浮浪者は一人もいない」ことに驚いています。街頭で出会った日本人は、小柄で、醜くしなびており、がに股で、猫背で、胸がくぼみ、貧相だがやさしそうな顔をした連中であつたと。いずれもみな自分の仕事をもっており、棧橋上の屋台はこぎれいで、こじんまりとした簡易食堂で火鉢があり、料理道具や食器類がそろつていた。それは人形が人形のために作ったという感じで、店をやっている男も五フィート足らずの一寸法師だつたと。ここに描かれている光景は当時撮られた写真にも見ることができません。ヨーロッパの眼から見たら、体格と歩き方が全然違う動作、しかも大体五フィートぐらい、一五〇センチちよつとの人間が多く、「一寸法師」とみなされた小さな連中にして、その歩き方もがに股で、どう考えてもみつともない、とバードは思ったようです。これが一八七〇年代の一つの日本人像。

それから二〇年後、一八九六年に、パリ外国宣教会、カトリックのM・リポー神父が、巡回布教で日光をはじめ各地を回っており、エゾ地北海道に赴く。北海道では、函館から室蘭に行き、内陸部のアイヌ集落を訪れています。

リポー神父は、三〇年前まで「みすばらしい漁村」にすぎなかつた函館が「完全に近代日本が生んだ地」となり、広い道路、大きな建物、各種の学校、色々な記念碑などがある「まるでヨーロッパ的、それよりもむしろアメリカ的な都市」になっていると指摘し、ここにいる日本人は「容赦な

くあらゆる古いしきたりを破壊し」、「ほとんどヤンキー的（アメリカ人）になって」いると述べています。ついで、函館から室蘭に行く船の中では二つのタイプの開拓者、移住民を眼にします。一つは用事で函館に赴き、自分の仕事に帰って行く開拓者、背が高く立派な体格の持ち主で、顔が黒く陽に焼けており、「自分の力で我が道を開き、一〇年、一二年、一五年もの重労働によって成功して来た人だと一見してわかる」者たちで、もう一つは新しい移住民です。この移住民は「大抵は脊が低く貧弱な人」で、「彼らが故郷に残しておいたこじんまりした壊れやすい日本の障子やふすまを思い出す」存在と指摘しています。移住者はまだ「故郷の形式ぶつた習慣にほだされて」いるが、開拓者はきびしい生存競争の下で、「密林などの労働によって鍛えられ」、開拓地の自由な空気を吸って独立してきた人で「すでに真のヤンキー型」になっていると。そして、日本人は「ひとたび蝦夷の土を踏み、そこに深く根を張ってくれば、十年の間で全く別の人になってくる」との感想を、「北海道の旅」に認めています。

ここにフランス人宣教師が「ヤンキー的」と指摘した背景にあるのは、北海道開拓がアメリカ人の指導により、アメリカ的な農法で展開されたことにもよりましよう。かつ密林の開拓は一人ではできませんから、集団でなしていく中においての新たな組織的な活力が必要になります。その組織の活力には、従来の動き方とは異なる、自由な創意工夫を可能にする協同性が求められます。リポーター神父は、この点に気づいたがために、開拓者が「自由な生活をしたくて仕方がない気持になる」との気分を船中の空気に読み取ったのです。移住開拓者は、開拓生活を経るなかで、故郷の慣習から自由になり、新しい生き方をしていきます。

ここには、わずか一〇年余、二〇年近い歲月の流れの中で、エゾ地の土地を耕し大地をきり拓く営みを重ねること、かつて横浜、そして途中で

見た、がに股で背が低く、歩き方がのろしている日本の農民たちとは違った者を見出せます。いわば新しい身体行動をもった日本人が誕生してきているのではないでしょうか。

このように日本人の姿が変わっているということをエゾ地北海道で特に強く意識したというのは、北海道が全く中央政府の直轄支配、ある意味で言えば日本の内国植民地であったことによります。内国植民地北海道は、加藤房蔵『北海道地理』（明治二六年 大倉書店）を見てもわかるわけで、旧暦の秩序ではなく万国歴たる太陽暦による国家暦の生活が開示されており、日曜日きちんと守られている。札幌駅には大きな『聖書』が置いてあり、港町小樽は *The's money* 時は金なり、というアメリカのモットーが町全体の姿を支配していました。その意味では、北海道こそ中央政府の直轄的な統治の中で、新しいタイプの人間像、最も早い国民的な気質というものが出てきていたということです。逆に、本州や四国、九州はどうであるかというと、旧来の藩、国があるから、その藩たる国のシステムを中央政府のもとにつくり変えていかなければならない。それが大変な作業で、旧慣の秩序を新国家の枠組みに改変し、再編成していくのには時間がかかる。しかし中央政府の直轄統治下にある内国植民地北海道は新しい国家の構図になぞらえて住民が暮らしていくわけで、その姿がフランス人宣教師にはヤンキー的に見えたということにほかなりません。

ちなみに北海道が面白いのは、一八九〇年代の米食率、米を食う率が一番高いのが札幌です。米を買って食うから米食率が高い。そうした意味で列島における食の構造の面からも北海道のあり方をみて、まさに中央政府の直轄的なものであったということなのです。

統合と同化

旧来の藩と言われたそれぞれの地域的な国のあり方が中央政府、明治政府のもとにどのように再編統合されていくかということは、「統合と同化」という問題になります。この統合の論理は、歴史を人類進歩の構造として把握し、発展の歴史として位置づけるなかで、文明を目指して発展していくのが新しい国家のあり方だとみなします。そこで明治時代には、「文明と野蛮の闘争」ということが盛んに言われ、「弊風打破」をかかげ、旧慣的秩序を野蛮だとか粗野とみなし排除していく。

この文明の論理を支えているのは、唯一の真理観といえますが、真理は一つだという認識です。真理はキリスト教の世界を文明の論理と重ねて説かれます。当時のキリスト教が説く論理は、文明世界がキリスト教国であり、未開野蛮なアジア、アフリカが仏教、イスラムであるとなし、文明の宗教たるキリスト教の優位性を力説します。日本は、「開国和親」をかかげ、この文明の論理を受け入れていく。文明の論理を受け入れるということとは、粗野で野蛮な異質なものを排除していくということになる。ここに日本の民衆的な世界、暮らしのかたちである文化は、文明と野蛮、「文野の闘争」の名の下に、旧弊野蛮にして、粗野であるとして排除、否定されます。

それぞれの村や町にある地域の協団体、コミュニティにあるところの自治的な結合の武器になるもの、コミュニティ的なものを支えていた村祭り、村芝居をはじめ、寒修行や盆踊り等々の多様な行事があるわけですが、そういうものを明治政府は徹底的に否定していくことで、新しい国家の論理に町や村の営みを取り込んでいくこととする。

この当時出された布告は、村の地舞台、村芝居をつぶせ、妙な祭りはやめると。日本の祭りは夜に神様が来るから夜祭りが多いわけですが、そう

いう祭りは風紀を乱すからよろしくないと。それでも住民は己の祭りを守り残したわけで、そうした祭りは新しい神社体系の中で「特殊神事」と位置付けられております。

ここには、ある種の文明という単一の真理観によって、強い排除の論理が働いています。こうした文明の論理こそは、それぞれの町や村が持っていた暮らしのかたちである文化を破壊し、国家の論理にもとづく文化の造形をつながします。ここにある知の体系は、大きなものに向かう、中心に向かう統合の論理ともいえるものです。それは、進歩を目指すところの知識体系の創造であるし、無知であることの恐怖を思い知らせます。

国民の創出は、この文明への道をめざし、世界的規模でのシステムとしての議会、官僚制、教育制度、鉄道網、通信網等々をめぐり、ある共通のフォーマット、形式に似せて、鋳型にはめ込む形で複製をつくることでなされ、国家の枠組みに取り込まれて行くわけです。こうした形のなかで、それぞれの持っていた国の記憶を新たにするために、国民の歴史というより「国の歴史」というものがつくり上げられる。この国の歴史を学校教育の中で説く、国史を説くことによって、国民の記憶にあるべき「国家のかたち」を植えつけていく。日本で言えば、そのために出された記憶の根っこが万世一系の皇統であるし、日本の天皇は世界の国々の王の王なのだということ、「万国総帝」という論理です。こうした枠の中において新しい国の記憶を生み出すことによって、村や町にあった記憶が塗りかえられていきます。

いわば常備軍だとか産業経済を維持できないような小さな民の記憶は、国家が説く大きな記憶に呑み込まれ、同化統合されていきます。そのため少数民族だとか辺境の民、日本で言えばアイヌをはじめとする人たちの記憶というものは、同化させられない限りにおいて、排除の論理が働いてい

くことになる。ここには、彼ら少数者が劣って、貧しく、粗野な非文明な存在だという論理がずっと貫かれています。かくて日本の歴史は、日本列島の歴史ではなく、日本国の歴史として描かれるから、アイヌが登場するのはごくわずかなわけですね。こういう歴史の構造は、統合から排除されていくことへの恐怖と転落を生み育てていくことで、国民を誕生させます。

かくて国民は、日本国という空間に存在する人間であり、時間の単位としての近代を担いづる者とみなされます。そのため人々には、「国家の民」としてみなされる国民であるという規範の中で生きていくことが課され、近代という捉えどころのない目標をめざして歩むがために、際限のない競争に没頭させられます。ここに国家エリートとしての官僚は、国家の文化的同化主義を展開していくことで、良き国民の育成に努めます。同化への道は、読み書き能力、苛酷な労働に対応し得る「ガンバル」イズムといわれる持久力、衛生、予防接種、貯蓄への配慮等々を促します。なかでも健康という信仰が国民を魅惑します。この信仰こそは、現在でいえば「禁煙」の強制にみられるし、「メタバ」退治等々の健康ブームにつながる世界を生みだしたものだといえましょう。

ちなみに日本社会に日常化している「ガンバル」イズムはこうした営みで日常化した世界です。私は、「頑張れ」というのは嫌いです。頑張るからキレル。頑固に突っ張るから、「頑張る」というのは、負けたときの逃げ口上ではないかと思う。「こんなに頑張ってセールスしたのに、お客さん、これだけしか取れなかった」と言うと、何だか許されるような気分になるのではないかと思うのですが。だから、あんまり「頑張る」というのはやめたほうがいいと思うのですが。

「健康」という言葉は、宣教師ヘボンの一八六七年の辞典では「健康」という言葉は出てこなくて、「ヘルス」が「養生」となっている。やがて

七二年版のときに初めてこの「健康」というのに「ヘルス」が出てくる。こうしたなかで「健康」というのが一つの大きな存在となったのです。ここに「健康」というスローガンで、人間の同一化と異なる存在、身体に「違和」がある却不健康なものにみなして排除する論理を自明のものともみならず。健康のためには衛生的でなければならない、非衛生というのはよくないのだ、という話になる。

当然のこととして辺境の民たちは、そういう価値観によって、不健康で、非文明で、野蛮な存在と位置付けられていく。例えばアイヌの人たちの昔の記憶が無視され、そういう辺境の者たちを「土民」に貶め、そういう人たちの暮らしが近代という価値からみるといかに非衛生的にして非健康かを指弾し、非文明の証として糾弾してやみません。この作法は、それぞれの地域の言葉を方言となし、中央政府がつくった国語のもとに収斂するために、野蛮で粗野な言葉だとして排除してきたなかにも読み取れます。これは今でもみられることです。

まさに「進歩」「近代」という物質的進歩への参与は、差異の否定であり、異質なものの排除の論理にほかなりません。ここでは、辺境という存在、辺境からの視座を支えている小規模で分散した知の体系は貶められていきます。これらの個別的な営みは、学校教育なかでも国語と体育によって、同化と平準化がうながされていったのです。世界は文明の名により一元化、統一へ向かい走りだしています。

今こそグローバルと言いますが、当時で言えば、時間にして世界的な統一がなされたのは、一八八五年の国際子午線会議において、八六年一九世紀末に子午線が標準値となります。日本は一八八九年に東経一三五度を子午線の標準時と定め、世界的な標準時の世界に参入したわけです。

その前年、一八八八年に、文部省は直轄学校に、学生・生徒の「活力検

「査」を毎年四月に行うという訓令を出します。今で言う健康診断。こうして学校教育の中で健康診断を行い、学生の体力を検査し、体力向上を図っていくという営みが、時間の問題と絡んで行われているのは面白い。この健康診断が大体年に一回になるのは一九九七年ですが、こうした形で国家としての一つの統一体が出てくるわけです。

二 行進・行軍・運動会

L・ハーンの驚き

まさに新しい国をつくるということは、その国家の規範に合わせて国民を造形していくことであり、それに合わせて、話し方、歩き方、表現の仕方、あいさつの仕方、そういうようなものを教え込んでいくことにほかなりません。こうした訓練の成果を見事に表現してくれたのが、一八九〇（明治二三）年に来日し、松江の中学校に英語教師で赴任したラフカディオ・ハーン、小泉八雲です。

八雲の『ある英語教師の日記』にはお城の広場で学校帰りに出会った「可愛らしい光景」が描かれています。三〇名ほどの男の子のクラス、全員が着物で草履ばきで、帽子がない子どもたちが、「和服を羽織った美貌の若い先生」から歌を歌いながら行進することを習っている。子どもたちは歌いながら列をつくり、小さな素足拍子をとっている。先生は、気持ちのよい「高く明るいテノールで、列の先頭に立って歌の第二節をまず歌う。すると子供たちが皆それにあわせて歌う」。ついで先生が第二節を歌うと、皆がそれを繰り返す。もし誰かが間違えたら、もう一度やり直す。

その歌は、日本で最も高貴な英雄とみなされていた忠臣楠木正成の歌です。楠木正成の歌というと、小学唱歌の「青葉しげれる桜井の」という落

合直文「楠公の歌」の「桜井の訣別」を思い出しますが、それではありません。この歌は一八九九（明治三二）年のものですから。八雲が聞いた正成の歌は、その一〇年前、松江着任の前年一八八九年に刊行された有川貞清の『小学生徒運動唱歌』のなかの「楠公」でしょう。この『小学生徒運動唱歌』には、最初が「日本魂の歌」、ついで「忠孝の歌」、「武士の歌」、「体操の歌」となり、その中に「楠公遺訓の歌」、「小楠公の歌」、「小楠公、決死の歌」と三つ入っている。まさにこの歌集は、「体操の歌」について「遊戯の歌」、「競漕の歌」、「勸学の歌」、「英雄の歌」、「花月の歌」、「元寇襲来の歌」、「国体の歌」、「益荒雄の歌」、「軍歌」とつづいていき、最後に「愛国数へ歌」という構成です。ここには日本がめざした国家のカタチが読み取れます。楠公が三曲もあるのは、復古革命としての明治維新をささえた「尊皇」という精神的活力の原点に楠公があつたことによります。そのことを教え込んだのは頼山陽の『日本外史』です。『日本外史』で頼山陽は、楠正成、正行が別れた桜井駅を訪れ、その遺跡が忘れられている状況に「低回して去る能はず」、楠公の事績に想いをはせ、勤王の国日本を確認します。日本は天皇に忠君の国なのだという国のかたちを示したわけです。幕末の志士は、この国のかたちを自らの記憶にすることによって、倒幕に駆けていきます。まさに幕末の志士は、『日本外史』によって、尊皇の道という日本の歴史を手にいれることができたのです。

内村鑑三は、こうした頼山陽の『日本外史』が提起した世界につき、一八九四（明治二七）年日清戦争の年に箱根で開催されたキリスト者夏期学校における講演「後世への最大遺物」で言及しています。頼山陽は『日本外史』を書くことで思想を残して日本を復活させたとなし、その影響力を説きます。この書で日本の歴史が出来たわけで、頼山陽の『日本外史』は内村のみならず世代をこえて日本人の心を規定した作品です。

ちなみに「後世への最大遺物」は、人は生涯に何を残すかを問いかけたもので、金、思想、文学等を残せるのは限られた人でしかないが、誰にもなしうることは「この世の中を私が死ぬときは私の生まれたときよりは少しなりとも善くして逝こう」との想いだと述べた天文学者ハーシエルの言葉を紹介します。このメッセージは多くの青年の心に火をともし、それに衝き動かされた青年の一人が青山士、パナマ運河開削に参加し、帰国後荒川放水路、ついで信濃川の大河津分水建設に従事します。これら青年の心には、明治という国のかたちを規定した勤王、楠公につらなる想いが内村の言説とともに刻印されていたと言えます。

このような国のかたちを体現した楠公という存在は、天保生れの新島襄にとり、内村以上に圧倒的なもので、生涯を規定する指針であったようにです。京都御所の横にある新島襄旧宅の書齋には、湊川の墓碑「嗚呼忠臣楠子之墓」という拓本が掲げられている。新島襄という人は、楠公を見ながら、激しい攘夷の心、ナシヨナリズムを己の心に秘めキリスト者たる歩みをしております。

まさに楠公という存在は、明治における日本の国のかたちをつくる国民精神の規範にほかなりません。このことは、日清戦争後に住友家が創業二〇〇年にあたる一八九〇年を記念し別子銅山の産銅で鑄造した楠木正成像に見ることが出来ます。正成像は、一八九七年一月に完成し、一九〇〇年に宮内省が献納を認め、宮城（現皇居）前に設置され、現在にいたっています。

いわば楠公の歌は、この「運動唱歌集」をはじめとし、小学唱歌として歌いつがれ、学芸会等の定番となり、新生日本をささえる国民精神を生み育てたのです。ちなみにハーンが聞いたと思われる「楠公遺訓の歌」は、「建武の昔正成は 肌の守りを取出し 是は一歳都攻ありし時 下し給ひ

し綸旨なり 之を汝に譲るなり 我兎に角になるならば 世は尊氏が世となりて 叡慮を悩まし奉らは 鏡にかけて見る如し さは去りながら正行よ 父の子なれば流石にも 忠義の道はかねて知る（略）嗚呼叡慮を安んじ奉れ」というもので、「七生報国」につらなる思想が生そのまま歌いこまれています。どういふメロデーで歌ったのかわからないものの、これで行進させられるというのは大変だったことでしょう。

ハーンは、お城の二の丸広場で繰り広げられた松江を中心とした四〇キロ圏の村や町の小学生徒六、〇〇〇人が集まった大運動会についても記しています。一〇〇人の綱引きなどがあるなかで、一番すばらしいのが垂鈴体操、ダンベル体操。体操教師の指揮のもとに六、〇〇〇人が整然とダンベル体操をする光景に感嘆の声をあげています。ここに見えてくるのは、行進の練習をし、整然としたダンベル体操、子供たちが組織的な行動ができるようになっていく。学校教育は、唱歌による行進などを教え、国民に相応しい身体行動を育てていきます。

この「小学生徒運動唱歌」は、「運動遊戯の間に之を和唱せしめ児童の悪習卑風を矯正するの材料に充てんとす」との緒言からも読み取れるように、一八八七年に森有礼が提唱した兵式体操につらなるものです。ちなみにヨーロッパでは、一六〇〇年代にスウェーデンのグスタフ・アドルフが、兵の進退について、行進だとか退却だとかというものについて集団的な動作の研究をして傭兵に用い、一七五〇年代にはプロシヤのフリードリッヒ二世が音楽による行進をしております。一八〇〇年代になるとナポレオンの戦争が国民が自ら国のために戦う思想を生み、兵制が大きく変わり、戦う意思のある国民が戦うようになってくる。ここに兵士の身体所作は、軍隊のみならず、組織的行動への眼を開かせます。この原理を森有礼は教育論として説いたわけです。

森は、一八八五年に埼玉県尋常師範学校の演説で、生徒の教育にあたって必要な徳目が従順、友情、威儀となし、その養成に兵式体操が役立つと位置づけております。いわば兵式体操は、国家有事の日に武官となし、兵隊となつて国を護らせる目的で学科に加えたのではないとなし、兵式体操で養成しようとするのは軍人にもっとも大切な「従順の習慣」、軍人がそれぞれを伍を組み、その伍には伍長を置き、伍長は一伍のために心労し情を厚くする「友情と連帯」、隊の中では司令官が隊を統率監督するに相応しい「威儀」を学ぶことにあると説いています。そのために生徒は、交互に司令官となり、兵卒となつて何度も訓練することで、従順、友情、作法にかなつた立ち居振るまう威儀が身につくわけです。ここには、組織を支えていくための原点として、兵式体操によって目上の者への従順、相互の友情と連帯、威儀という三つの気質を養成していくことの重要性が語られています。

従順と友情と威儀の養成は、人間にとり、日々皆戦争、常在戦場を生きるための必須な要件なのです。社会が常在戦場であるという認識は、日本が二等国から一等国になっていくために、列国に対して戦争ではなくて、産業経済、工業の戦争を行い、勝利するために求められたのです。この産業経済の戦争に勝つためには、従順と友情と威儀を身につけた者が要る。工場なら工場で生産性を高めるためにも相互が協力的な行動をなさねばなりません。そのためには、組織の活力を最大限に引き出せるように身体行動を改造していくことが求められた。その一端はチャップリンの「モダンタイムス」が描く工場の流れ作業の中に見ることができます。現在、このような光景は工場労働で一般的になっています。森が兵式体操に期待したのはこうした産業社会が求める人間類型としての国民でした。まさに森の体育は、徳富蘇峰が指摘したように、「民育」にほかなりません。

そのためには、日常を戦う国民養成の担い手になる先生を養成する師範学校が必要です。まさに師範学校では、寮生活をとおして日常起居する場で、集団的、組織的行動を学ばせ、規範に合わせる人間がつけられていく。東京師範学校では、体操の管理を陸軍に任せたらどうかとの意見がでたように、軍人の力を借りても日本人の身体を産業社会向きにつくり上げる、産業戦士の育成が語られました。ここに学校教育は、国民養成をめざすことで、軍隊を支える兵を生み育てる場となっていく。

こうして育成された師範出の先生は村や町に赴任して子どもたちを教えますが、その内容は村の生活との関係ではなく、まさに師範で身につけた知識であるために、学校の教育と村の暮らしとはギャップがある。今までは母親がしつけを担い、子どもを育てたのですが、学校の先生に習うと子どもが生意気になり、学校で習った知識が母親より多いので母親を「無知」だと馬鹿するようになり、だんだん母親の地位が低下して行く。

体験的な知が粗野でつまらないものだと思定されてきて、机の上の知識ばかりを追うようになる。家庭教育の担い手である母親の権威が否定されていく。こうした近代教育の在り方を問い質さないかぎり、いくら「道徳教育」「しつけ教育」を声高に論じても無理がある。この「しつけ」というのは「躰」という字で、「身」に「美しい」です。国字、和製漢字。だから、身が美しい、身を美しくするというのは、身体の教育、身体、体で覚えることだということを示唆しています。

そのような意味で言うと、教育の第一は身体の律し方であつたわけです。このことは、日本語には「腰をすえて」、「腹が読めない」、「腹がすわる」胸の落としどころがとか等々、腰、腹、胸などの身体によせてある種の決定的行為を表現している日本語の言語作法にみることができます。こ

ういう言語作法は日本人の身体行動に結びついたものと言えましよう。日本舞踊では、足で立つのではなく、腰で立つことが基本であるように。今流行のエアロビクスが足を蹴飛ばし、腕を振り回すのとはまったく異なっています。そこには日本と西洋の決定的な違いがあります。その一端は、野球でみれば、日本人捕手の蹲踞にもみられましよう。蹲居というのは日本の動法なわけです。こういう日本の身体文化は兵式体操によって否定されていくわけです。

歩き方の改造

音楽に合わせた行進には歩き方の改造が必要になります。この歩き方の改造で鋭い考察をしたのが武智鉄一、武智歌舞伎を提唱した人物。彼は日本人の歩き方が三三五五のそぞろ歩き、「なんば」だと言つ。「なんば」というのは「南蛮」からきており、佐渡の鉱山に南蛮滑車が入つてくると、ちようど丸山明宏の「ヨイトマケの歌」、歌に合わせて「エンヤコラ」とやるあの動法ですが、この南蛮滑車の所作が「なんば」という呼称になったのだという。

だから、右足と同時に右手が出る、左足と同時に左手が出る。彼に言わせるとこれが日本人の本来の歩き方、「なんば」の体勢だと。それは農民の労働、農民が土地に向かって耕す作業は孤独なのだ。鋤をふるうときの形、そういうようなものが歩きの中に入っている。この歩きの動法は、集団行動には合わないから、徹底的に変えなければならなかった。そこで学校における行進の訓練、兵式体操による訓練が徹底される。

子どもたちは、体操などで「駆け足」をさせられると、右足と右手が一緒に出てしまつからしばしばぶつかふ。そうすると、学校の先生は「おまえは運動音痴だ」とかと怒って矯正する。東京師範学校では「行軍旅行」

と称した遠足などで国民に相応しい「歩き方」を教えている。いわば朝礼にはじまり運動会とか体育というのは、行進・整列・駆け足だとかを日常化していく営みで、そういう形を教えることによって体の改造をしていく。こうした学校生活のなかでくり返し訓練されていくことで、足と手が交互に出て歩くという現在の歩き方が身につき、統一のとれた集団行動がとれるようになった。

こういう「なんば」からの脱却による病理は、民衆の身体にどのような変化をもたらしたかにつき、陸軍軍医たちのいろいろな調査に読みとれます。大正一二年に久留米連隊で実施した「現役兵の職業と体格」は、農耕・畜産産業、要するに農業従事者が5割、ついで物品販売・漁業・製塩・土木建設ついで官吏公吏などからなる七万―三五六名の徴集兵を調べたものです。兵の身体は五九・七キロぐらいの体重が一番良い体格で、身長が一六三センチ位。ちなみに体格を職業別に見ると、教育を受けている者のほうの身長が高く、無職や農業者の身長が低く一六〇センチ。逆に体重は漁業製塩業が六〇キロで、官公吏・雇人が五三キロという調査結果がでてくる。

この調査を踏まえて秋季演習における「行軍病と軍靴」の関係を調べている。下士以下一二七五名で行軍病罹患者が二五五名、二〇パーセント、うち半数の者が「錬兵」を休ませ入院が必要だと。演習は、行程の如何に関係なく疲労多めで、患者が多発の傾向があるが、退却の際はほとんど落伍者を見ない。罹患率は、初年兵二・七パーセントで二年兵一六・九パーセントに比べて高いというように、「経験と用意の不備」がみられること。ここには、初年兵となった百姓をはじめとする民衆が軍隊に徴集され、兵隊になることで、軍靴、はじめて靴を履くことがもたらした傷病がみられます。日常は草鞋か下駄ですから。だから百姓が兵隊になって一番困るの

は靴を履かされたことです。

軍医は、靴による傷病を防ぐために、靴下を二〇日に一足の支給では不足するから、支給を増加し、地質の改善が必要であること。特に久留米連隊のように農業者が大多数を占める部隊では先端の広い靴下が有用と。靴も幅広にしる。国家は、軍隊を支える強兵をつくる上で、まず靴と洋服の文化になじませるのに苦労しております。まさに軍隊は、日本人の心身を「国民」に改造していく上で、一番大きな役割を果たしており、「人生道場」だと言われるわけです。民衆は、軍隊に入ることによって、全くいままでとは異なる新しい歩き方、身の処し方を学ばなければなりません。軍隊に入ることとは、兵隊になることで身体行動を含む行動規範が体にたたき込まれ、社会性を身につけ、国家の規範に基づく行動というのを身につけていくこととなります。

三 「軍隊内務書」に読む暮らしのかたち

良き兵隊への道

民衆は、入営すると、「軍隊内務書」に規定されている軍隊生活のイロハを身をもって学ばされます。この軍隊生活を上手に過ごすには、「内務書」や「典範」類の世界を解説した「歩兵須知」等の名称で刊行されていた各種の軍隊案内書、マニュアル本で基本的なことを知らねばなりません。そこには私たちがかつて学校で習ったことが書いてある。ここに紹介されている軍隊生活の諸相を大正六年の『歩兵須知』でみていくことにします。軍隊は、一般社会を「地方」と称していたように、自己こそが世界の中心とみなしていました。この思いは、「序」が冒頭で「軍人は国民の精華にして其首要部を占む故に軍人の修習の良否は直に郷党閭里の風習を左右

し以て国民の精神に偉大の影響を及ぼすものなり」と説いているように、良き軍人になることは町や村が立派になることでした。そのためにも軍隊教育を受ける者には、上官の命にひたすら従って学術を習得し、「社会の風潮を向上し国民の隆興を増進すべき責任」が課されており、そのため兵隊を教え、指揮監督し、「常に忠良の兵卒たり淳朴の国民たらしめん事のみ日夜苦心せられ実に兵卒の父母」である上官には父母につかえるごとくつかえねばなりません。上官は、忠良な兵卒となり、純朴な国民を育てなければなりません。これが日本の軍隊をささえる原点となった規範です。

軍隊における日常生活の単位は内務班で、内務班が戦闘集団としての小隊になる。この内務班における生活を規定したのが「軍隊内務書」で、軍隊生活の決まりがすべてにわたり詳細に説かれています。この規定を平易に教えたのが『歩兵須知』のような軍隊の心得書になります。そこでは、武官階級、服制から軍人に相応しい規律である「自己の心得」、軍隊の日常、内務班の起居として兵営における暮らし方、軍隊の制度から日常に関するあらゆる事柄を具体的に教えている。兵営生活は、まず起きたら、窓をあけて、毛布やシーツを振るって丁寧にたたみ、枕の上へ置き、それから顔を洗い、兵器を整備する等々。

兵営内における礼儀にかなう身のこなし、起居の容儀の一端を紹介しましょう。起床ラッパで起き、服装を整え、点呼を受ける。点呼後、窓戸を開き、毛布敷布を振るい、丁寧にたたみ、枕をその上に置き、顔を洗い、兵器を拭い、被服を整頓し、午食後に毛布敷布を展へて、寝ることは禁止された。朝の点呼から夕方までの点呼までは寝台上に腰をかけること、寝ることは禁止されていた。朝の洗面は次のように説かれています。

1 毎朝起床後には顔を洗い口腔の清潔を計るべし。

- 2 洗面盥は其数少なきを以て互に相譲るべし、場所狭き時も亦同じ。
- 3 「トラホーム」疥癬、痲病等を患らへる者は患者用の洗面盥を使用すべし。
- 4 洗面盥は使用後清潔にし他人に渡すか或は旧位に俯せ置くべし。
- 5 水道を用ふる時は排水栓に注意し「ポンプ」を使用する時は叮嚀に取扱うべし。
- 6 所定外の場所に於て洗面すべからず。
- 7 清水の使用を節約するの習慣を養うべし。

この教えは、団体生活の決まりとして受け継がれ、今でもいくつかはあ
るのではないだろうか。水道を用いるときは、排水栓に注意し、ポンプ
を使用するときは丁寧に取扱い、水道の蛇口のひねり方というのを教え
なければならなかった。きゅつと一遍にばか力でやると、パツキングが痛
む。それで、キユキユとすると教えるのだと教える。ある時、内務班長さん
をしていた人に「どうやって教えたのですか」と聞いたたら、「かあちゃん
のおっぱい、キユキユとこういえば、兵隊が一番よくわかってくれた」
と。そういうところから手とり足とり教えていき、民衆を一人の兵隊、国
民に育てていくわけです。

暮らしの作法

民衆は、軍隊生活のなかで、衣服の着方、食事作法にはじまり、室内外
に於けるマナー、洗濯物の干し方、廁の使い方等々にいたるまで、あらゆる
日常生活で求められる暮らし方の決まり、「礼儀作法」ともいふべきも
のをたたきこまれ、新しい国民に育てられたのです。ここで説かれた世界
の一端をつかがうこととします。

- 1 舎内は勿論廊下に於て痰を吐き煙草の吸殻其他の塵を棄つべからず。

物品は所定の位置に整頓し之を取乱すことを禁ず。

- 2 室内に在りては静肅を旨とし粗野の言行を慎み高声に談話すること
を禁ず。

3 煙草は所定の位置にて吸い火薬庫、其他炊事場、浴室、諸倉庫の近
傍にては厳禁なり。又特に許されたる飲食物の外室内にて飲食すべ
からず。

- 4 室内に入る時は先ず靴の泥土を叮嚀に拭いて入るべし。

5 窓より湯水其他の物品を投げ捨てるは厳禁なり。又窓の椽にて物を切
ること物を干す等を為すべからず。

- 6 湿気ある被服は物干場に出し乾かすべし。

7 痰は必ず痰壺に為し室内又は廊下に為す可からず。

なかでも「食事の心得」「厠の清潔」「身体の清潔」「浴室に於て守べ
き規定」はこまかに教えています。食事作法は現在の給食文化で教えるこ
ともつながりましょう。

- 1 軍人は喫食の速かなるを要する場合ありと雖も平時に於ては頓食急
飲は消化を害するを以て完全に咀嚼し適當の速度にて執食するを良し
とす。

2 飯も采も口の内にあるものを払いて後含むべし。口中にある上に復
食うこと勿れ。

- 3 何れの場合に於ても先ず飯より食い始むるを礼とす。

4 口音高きは下司の性なり慎むべし。

- 5 食匙又は箸を強く食器に衝突して高き音を発せしむべからず。

6 一器中より各自食物を取る場合に於ては互に相譲り競争するか如き
粗野なる行為あるべからず。

廁の作法は、洋風文化の採用にともなう排泄行為に対応すべく、具体的

に説かれています。その説明には未知なる世界を教える苦勞がうかがえます。

- 1 大小便は廁以外に於てなすべからず。
- 2 小便を為すときはズボンの前明きボタンを下方より三個はずし、ズボンをやや下方に下げて然る後放尿せよ、然らざれば放尿後ズボン及ズボン下を汚すことあり。
- 3 小便は必ず石段に上りて之を為し前方の壁を汚さざること注意すべし。
- 4 痰を壁に吐き掛け煙草の吸殻或は紙きれ等を尿壺内へ放棄すべからず。
- 5 放尿後は股ボタンを正しく掛くべし。
- 6 上廁の際帯革は之を戸外の釘に掛け置くべし。
- 7 大便はズボン及ズボン下を膝部まで下げて之を行うものとす。ズボン下の紐を壺中に垂下せざること注意すべし。
- 8 上廁後は扉を確実に閉じ置くべし、去る時も同じ。
- 9 上廁中煙草を吸い或は齒刷毛を使い或は隣廁と通語すべからず。
- 10 便通後は必ず紙を使用しズボン下を汚さざること注意すべし。
- 11 上廁後は必ず手水を使うべきものとす。
- 12 下痢患者は必ず定められたる廁に上るべし。又健康者は患者用の廁を使用すべからず。

「身体の清潔」は、しばしば入浴し、「皮膚面に附着せる有害物を除去して病を除き」「皮膚の機能を良好ならしむるの効あるものと」紹介し、頭髮の長きを「不潔」となし、「軍人の容儀」にかかわるから三週間に一回必ず短く刈ること、爪の長きは「污垢」を「堆積」しやすいから一週一回切ることなど、入浴の効用から散髪、爪切りに説きおよびます。この作

法は学校教育で教えたことでもありません。

入浴の作法では、多人数入るから入浴時間が一五分間程度となし、細かく教え諭しています。

- 1 「トラホーム」、皮膚病、花柳病等の伝染性患者の入浴には患者用浴槽を用いること。但し場合に依り健康者と同じ浴槽を使用するときは最後に入浴すべし。
 - 2 被服の著脱は浴室内でなし、他人のものと混同せざる様取纏め置くべし。金銭、時計等貴重品は浴室に持ち行くべからず。
 - 3 入浴中は静謐を旨とすべし。吟歌、高声其他他人の妨げとなるべき行爲ある可からず。浴槽内に於て石鹸を使用し又は被服等の洗濯を為すべからず。
 - 4 妄に湯殿の温度の調度をなすべからず。必ず衆人の合意に依るべきものとす。
 - 5 自己の身体は自ら之を拭掃すべし。敢て他人の助力を俟つべからず。
 - 6 湯水の量は限りあるを以て其の使用を節約すべし。
- この浴室の作法は、脱衣場を濡らしてはならない、浴槽に入る前に先ず「不潔なる部分」をよく洗つこと、浴槽中で身体を洗つ、頭髮、耳頸、腋下、陰部、手足ことに足指の間等を注意して洗つ、石鹸を用いると効果が更にあること、ただし石鹸を使用した時はよく洗いおとさねば、かえって身体を不潔となし、襦袢やズボンなどの下着を汚すことになること、入浴後は急ぎ丁寧に身体を乾かした後に被服を著すべし、等等。このように入浴作法が実に懇切丁寧に紹介されています。これらの「清潔」をめざした各種の作法は、室内、食事、廁、入浴とあらゆる暮らしの営みにわたっており、文明国民としての嗜みとみなされたのです。ここに説かれた衣服は正しく着る、窓から湯水その他の物品を投げ捨てるは嚴禁、窓にものを

干すな、等等。現在、このような作法を聞くと実に馬鹿げたことだと思つてもいれませんが、明治大正昭和と最近まできわめて日常的に説かれていたことなのです。

こうした営みをくり返すことで、ある種の「文明」の暮らしが身につく。現在の私たちがいる。旧来の暮らしにない世界を平易に説く作業は、内務省が微細に描いているように、煩瑣なことだったのです。ここに説かれた世界は、今でも学校、寮生活、公衆浴場をはじめ、マンションの規則にみられるのがあります。いわば軍隊の方式は、小学校にはじまる学校教育のみならず、各種の企業文化にも採用されていきます。まさに軍隊は、学校以上に、日本国民を育成する圃場だったのです。いわば軍人の習修の良否は郷党社会の善し悪しにつながるものにほかなりません。

このような訓育は、兵営生活のみならず、出征部隊に対する師団長訓示にも読みとれます。列車内では頭に手拭いをのせるな、駅に入る前に襟元のボタンを留める云々から、宿営地で銭湯に行くときにはきちんとしていけ、だらしない格好をするな。街路の果物や花を取ってはならないとか、歓楽、遊びは高尚なものをなし、猥褻なる市街に行くのは慎み、体力を消耗しないようにとも。軍隊は、このような訓育を日常的につみ重ねていくことで、国民に相応しい素養を身につけさせ、日本国民を育成したのでした。ここに説き聞かされた作法は、台湾が日本の領有になったとき、台湾総督府民生局の手になる『台湾応用 作法教授書』（明治二十九年）にも読みとれます。

この『台湾応用 作法教授書』は、軍隊内務書と全く同じで、朝起きたらまず寝具を片づけて、顔と手を洗い、父母と目上の人に挨拶しなさいと挨拶の仕方を具体的に図示し、隣室では大声を出さなかと、立居振舞いを教えようとしたものです。

また無益のものに眼を向けるなとなし、例えば教室に座つたら、両目は前方に注ぐこと。口は厳しく閉じなさい。頭は右左に傾げざること。両肩は水平になすべきこと。両手は左右両側に垂れ下げること。下腹は後方に引くべきこと。両足は軽く接して、膝より以下は直角になすべきこと。足先は開きて六〇度になすべきこと等等。日本での営みは、琉球・沖縄から台湾朝鮮へ持ち込まれます。近代の国民はこうした造型作業によって育成されたのです。

四 病める心身

精神病のこと

日本の民衆は、軍隊があるマニュアル化した規範を身につけさせていくことで、国民に造形されていく、近代の身体につくられてくるわけです。ここに育成される兵隊は民衆、日本国民の原像にほかなりません。その意味では軍隊が直面した兵の心身問題に国民が負わされた縮図が読みとれます。庶民の心身状態は軍隊の諸調査に読みとれます。

軍隊は、病める心身として精神病、花柳病と言われた性病と結核を重視し、その対策を考えるために諸調査をしています。精神病については、日露戦争の公的記録である『明治三十七八年戦役陸軍衛生史』に、戦争で直面した問題が詳述されています。

日露戦争は、プレ総力戦と言われているように、「欧州大戦」といわれた第一次世界大戦の前期的なものでした。長期対陣と白兵戦で大量の死者が出た。戦場では、戦闘による傷病だけでなく、戦線離脱をはかるための自傷をはじめ精神に違和をきたした戦地精神病、戦時精神病と呼称された症状が対陣の長期化につれて増大します。戦争に対する恐怖と悲惨なる感

情、自己行動に関する心労によって、さらに残してきた家族のことを考えて、精神不安になるのが多い。そこから脱出する一つの行為が自殺の企図と脱走になります。岡山医学専門学校教授荒木蒼太郎は、「戦役に関する精神病に就いて」で、日露戦争が日清戦争・北清事変と比べ、兵の動員がはなはだ多いがために「狂者」「自殺者」をはなはだ多く出したと述べています。その様相は後のヨーロッパ戦線でさらに広く顕在化したがために、ヨーロッパでは「戦時神経症」の研究が深められます。

日本の精神医学をつくった呉秀三は、日露戦時における陸軍兵役の精神病患者を調査し、戦前・戦後と比べて戦中が三倍となし、境遇の変化、軍紀の厳粛によって「心身の努力」が要求され、「発狂」する。また「精神中期状態」の者は、規律ある軍隊生活になじめず、「兵業修得」が困難なことが重なって発病していると。

第三軍の軍医部長鶴田禎次郎はその対応に追われたことを「日記」に克明に認めています。呉秀三は、こうした戦場の様相を、「日露戦役中余の実験せる精神障礙に就いて」で総括しています。その症状は、最も多い「悪口」「証告」について、「銃殺」「死刑」「危害」で「毒殺」される、投獄される、憲兵が自分を逮捕しに来て我親殺害せられたとか、親族の婦女子を辱められたとかと興奮したり、「小隊長戦死」と言ったので「露探」ロシアのスパイとみなされ軍法会議にまわされると思ひこみ、連隊の不名誉と心痛して「被害妄想」を発症したもの。「誇大妄想」としては、天皇陛下夢に現れ金鷄勲章を賜うと言ったとして「感状」を請求する者、「余は露国天子」とか「將軍」なり、「旅順司令官」なりと語り、將校に昇進したと思ひこむ者。さらに一方に普通るときでもしよっちゅう突撃し、部隊長のところに行つて「あそこを占領した」と言い、「すぐ応援を頼め」と騒ぐ者も出てくる。戦場における恐怖感の一形態がこのよつな姿をとつ

たのです。「突撃趣味」と評しています。こうした戦時の精神病患者にみられる「譫妄」たわごとは、「戦争及び愛国心に関するもの」で「愛国狂」ともいわれていると。兵隊は、軍隊生活で旧来の暮らしと異なる文明の暮らしを教え込まれましたが、その強制による躰が精神の違和感を押し殺したままのこしたために、戦時に爆発したわけだし、平時においてもいつか営倉に入れられ銃殺されるのではないかという恐怖感にとらわれる日々であったことがわせます。

日本の精神医学は、欧州大戦におけるヨーロッパの戦地精神病研究の成果に学びながら、軍陣医学の課題として研究を深めていきます。東北帝国大学教授丸井清泰は、「戦時神経症に就いて」で、「戦時精神病」とかと呼称されていた名称を「戦時神経症」と統一することを提唱し、いままでの電気ショックだとか、暗示療法・催眠療法は有効でないとして、精神分析療法が最も効果があると説きます。

軍は、神経を病んだ將兵のために、一九三六年に国府台衛戍病院が国府台陸軍病院となり、三八年に戦時精神神経疾患対応症院として戦時神経症の中核病院とします。ここに勤めていた齊藤茂太は、当初は戦地、海外から送られてきたけれども、輸送がとだえたこともあり、やがて国内からの移送者が多くなってきた、国内の兵たちの精神障害が非常に多くなった。ちなみに一九三七年から四五五年の初めまでは北支、北支那から一〇八七人中支から一〇五七人、それから南支から一六九八人と、戦場から移送されてきたわけですが、敗戦間際になってくると、広島、小倉などの内地部隊から列車で送られてくるのみならず、東京周辺の防空部隊からの患者が多くなったと証言しています。これらの者は、演習中に帯剣を失くした、対空戦闘による驚愕等等、兵士の素質低下が表面したものが増大したことがわせます。戦争は末期症状そのものです。

この増大に対応すべく、一九四〇年に三〇〇床の傷痍軍人武蔵療養所を、一九四一年に一〇〇床の傷痍軍人下総療養所を開設。前者は四五年に国立武蔵療養所となり八六年に国立精神神経センター武蔵病院に、後者は四五五年に国立下総療養所となり二〇〇四年に現在の下総精神医療センターとなっています。日本の精神神経症に対応する病院は陸軍の戦時神経症を収容する器として出来た世界なのです。想うに戦場に行かされることによって心の傷を受けた者の問題は、戦争が拡大する中で増大し、さらにそのことが広く社会問題になってきていたのです。

「花柳病」のこと

軍隊に象徴される国家の問題は、戦時神経症の増大のみならず、花柳病と称された性病にもみられます。性病を「花柳病」と言うのは男の勲章だという意識の表明です。ここには、日本の女性観なり、性意識があります。軍隊における花柳病が大きな問題になってくるのは大正期になってからです。

陸軍二等軍医正小池正晃は、一九二五（大正一四）年に「皮膚及花柳病講義」で、一九〇九（明治四二）年から一九二〇（大正九）年の壮丁検査をもとに花柳病と言われた性病が非常に多いのが長崎、佐賀、福岡、島根、愛媛、高知で、東北では、秋田を除くと大体少ない。陸軍では、こういうような全国的な分布を踏まえて見ると、内地が一〇〇〇人に二人、台湾が三二人、なかでも多いのが小倉の第一二師団。海軍は陸軍よりさらに多い。

この数値は、欧州大戦における陸軍でみれば英国が一〇〇〇人につき五〇人で、米国が一〇〇〇人につき一六〇人。この数値の差は、英米が私娼の世界なのに対し、日本が国家管理売春、公娼制の下で検徴によって娼妓

の性病検査をしていたことによりまじょう。小池は、花柳病全体が年々減ってきていたが、一九一九年から増加に転じ、一九二三年になると非常に多くなると指摘しています。ここには、一九一八年がシベリア出兵ですから、シベリア戦争の影響が国内的にもこういうかたちの問題として出てきたのではないでしょう。それだけに花柳病対策が重要になります。

歩兵第三連隊付きの三等軍医正熊谷用蔵は、この課題に対応すべく、「都会兵の性欲生活」で兵隊の性意識を調査しております。この調査は、日本人男性の性生活に関する厳密な調査にして、最初のものではないでしょう。兵の性意識を把握することで、いかに性管理をすれば良き性病対策が可能かを検討しようとしたものです。熊谷は兵士の性生活の実態を次のように総括しています。

- 1 兵卒一、〇六二名中少くも七〇二名、約三分の二がすでに童貞を破棄した者であり、入営中に初通する者は極僅少であること。
- 2 妻帯者たる「定情者」数は都鄙によって比率に差異が無いが、職業には関係があり、演芸師、水夫、鳶、官吏、会社員、工、農、労働者、飲食店業、商の順序で六〇パーセント以上を占めており、ひとり教員学生だけが格段に少ないこと。
- 3 初交の年齢は、最も早いのが二歳で年齢と共に其の数を増し、一八歳から漸次少くなり、徴兵適齢後特に減少する。都鄙を区別すれば一五歳から一九歳の者が郡部で多く、二〇歳以後の者が都市に多い。職業から見れば農が一七、八歳、商・工が一八、九歳の者が多く、この間一年の差があること。
- 4 初交時の季節は春、全体の五分の二で、次いで冬、夏、秋の順で、郡部では秋が特に多いこと。
- 5 初交時の相手の年齢は二〇歳以下が八割であり、一六―一八歳が最

も多く、男女の年長関係は女子が年長の場合が三分の二である。相手の身分は都鄙で差異があり、都市では接客業婦が七四パーセントだが、郡部では四五パーセントでしかない。都市には娼妓が多数いることによること。

6 初交時の相手としての素人娘は三五・七パーセントだが、特に郡部では四六・五パーセントと接客業婦よりも高く、この素人娘の年齢は一四・二三歳で一七、八歳の者がことに多いこと。

7 男子は一四、五歳で「女郎買」を始める者もあるが、最も盛んなのは一八・二〇歳の頃で、野合はこれよりも早く一七、八歳に多いこと。

8 既婚者の約半数が毎月一回以上性交する性交常習者となっており、入営後もこの数が減少しない。但し入営後は幾分性交回数が減り、放蕩気分も消失し、禁欲者が増すこと。

9 素人と初通した者も情婦関係を続けるのはごく少数で、その多くは接客業婦を相手とするようになり、入営後は娼妓が大多数で漸次私娼窟に出入りする者が増加の傾向であること。

10 花柳病罹患者の総数はおそらく二〇〇名、全体の一七パーセントを下らず、不潔性交者の二八パーセントに達していること。

11 花柳病罹患者は年齢に比例して増加するが、入営後にやや減少するものの、二年兵となれば再び増加する。兵営生活に慣れるにしたがい再び性欲生活が盛んになるようであり、職業でみれば、農、演芸師、労働者、水夫、工、飲食店業に多く、教員学生、農、商ははなはだ少なく、都鄙の関係では都市が多いこと。

この調査から日本人青年の性にかかわる意識と行動が読みとれます。花柳病は、入営前の生活環境からくる性体験に強く規定され、軍隊生活になじむことで増幅されていったのです。ここに提示された性意識は、初交の

年齢が郡部で一五歳から一九歳で、一七、八歳が一般的なのに対し、都市部が二〇歳以後、郡部では四五パーセントが一四・一八歳の素人相手で一七、八歳が最多なことにみられるように、農村部が旧慣的秩序を色濃く残していたことをうかがわれます。いわば民衆の身体感覚は、キリスト教的な性道徳を説く文明の論理にかわりなく、旧来の営みに規定されていたといえましよう。

それだけに軍隊は、入営後に文明の暮らしになじませる訓育に励みながらも、「地方」の「悪習」から兵を守護することに務めたのです。そのため性の管理をなし、外出先を健全な「公娼」に求めます。一方では文明・都市に取り込まれることへの懸念から、兵営内で娼をつくらせたらどうか、という話も出てくる。いわば日本の軍隊は、国家が説く文明の先端を走りながら、旧慣的暮らしとの跛行に苦しめられたのです。

五 「健兵健民」への道

結核をめぐる

軍隊が直面した問題は、性病以上に、結核でした。結核の蔓延は、兵力の基盤をゆるがすもので、一九二二（大正一〇）年までの間に軍隊内結核患者が毎年平均七〇〇有余、とくに一番多いのが近衛八〇人、第一師団七七人と他師団と比べてとくに多い数値でした。久留米衛戍病院陸軍一等軍医正山本幹雄は、この問題を「軍隊に於ける肺結核に就て」で、「禁闕守衛の重任を有する近衛兵にして毎年かくのごとき多数の患者恐懼に堪えざるものあり」と危機感をつのさせます。兵員の減耗数は、一八九九（一九一）（明治四四）年の一〇〇〇人につき二四四人から一九三二（大正二一）年が七三人に、特に肺結核でみると四八人が七三人と増加してお

ります。こうした軍隊における肺結核患者は兵隊の出身地の状況を反映したものにほかなりません。

海軍では、軍艦長門における結核の罹患率を見ると、下士官に少なく兵に非常に多い。そこで結核への対処は、軍医が指摘したように、その兵隊が育った地方社会、出身地の問題として対応せねばなりません。ここには工場法の審議に積極的に関与していくわけです。日本においての工場労働者の調査は一九〇三（明治三六）年に「職事情」が出され、一九一一年には工場法が成立しますが、その施行は一九一六（大正五）年になります。

工場法にみられた問題は紡績女工が結核の蔓延に関わっていたことによります。この問題を鋭く指摘したのが、社会医学の先駆者ともいべき石原修の国家医学会における「女工と結核」という講演です。石原は、五〇戸のある村里に、三重の紡績から一人の男子工員の青年が帰ってきた。結核での帰郷のため、その後五年間で村に三〇名の結核患者が出た。一方には、病気が「気恥しい」ので生まれ故郷に帰れず、外の町村に行き結核菌を振り撒く。「毎年一万三千余の結核患者が早晚いろいろな道を通り、工場から日本全国に結核を撒き散らしている。工場が結核を国内に散布して、世に立つて働く者の生命を絶ち、よし生命を絶たれないにしても体質の弱い者が何万人出ているかわかりません」と。その原因は、連続徹夜業にあり、五千人が「工業の戦争」のための犠牲者、この五千人の戦死者の外に二万五千人の重病者が出ている。これらの犠牲者は、日露戦争における「奉天戦で戦死者七、八千人、負傷五万人に相対する」に、いかなる「敬意で迎える恩典あるか」「平和の戦争の戦死者に国民は何をもってむくいるのか」と問い質し、「女工の運命悲惨」と問題の所在を鋭く告発してあります。

このことは、柳田国男も峠の村での見聞として、きれいな若い女性が縁側に所在なげに座っている。「ゴホン、ゴホン」とセキをするたびに、きれいな村里にいろいろなものが撒かれており、やがて若者の顔が青白くなっていくのだ、と語った世界にも通じるものです。こうして結核菌が日常的に撒かれ、日本全国が侵されていき、結核は日本の国民病となっていきました。

結核予防法が一九一九（大正八）年に公布され、工場法が一九二三年に改正されて一四歳未満の就業が禁止されますが、そのときには国民病と言われるぐらい結核が蔓延している。国民の体力増強が叫ばれながらも、国民の身体はこうした状況に放置されていたのです。ちなみに皇后陛下の令旨で結核予防会が結成され、秩父宮妃が総裁に就任するのは一九三九年までまたねばりませんでした。なお花柳病予防法の公布は一九二七年です。

桃太郎さんをめざし

衛生という観念を国民に啓蒙する取り組みは一八八七（明治二〇）年に築地本願寺で開催された「衛生参考品展覧会」などの企画にみることできます。衛生博覧会では、梅毒にかかった人の標本、トラホームや伝染病をはじめとする病症標本や病状の模型を展示、病気の怖さ、衛生の大切なことを教えようとしたもので、長年にわたり各地で開催され、人気の高い催しでした。その展示は、好奇心をひくためにも、どく毒しく、ものすごくグロテスクで、見るものを怯えさせるものでした。私は三〇年ぐらい前に中国東北部のある大学に行った時、ちょうど中国は文化大革命が終わって新しい時代に向かうなかで、「文明生活」を宣伝し、衛生と産児制限が強調され、各種の啓蒙活動が行われていました。街頭では、一人っ子政策を推進するためにコンドームや携帯ピデと啓蒙パンフが配られ、街頭の掲

示板には「こつこつというようなのが清潔だ」と、具体的な事例をあげた壁新聞が眼をひきました。衛生展覧会は、性病の症例、無頭児をはじめとする奇形のホルマリン漬けの標本など、日本と全く同じでした。ここには、文明を目指す国家の営みにとり、衛生、健康が大きな価値と認識されていたことがうかがえます。

健康促進という課題は、総力戦を担う「健兵健民」をめざしたものと位置づけられ、一九二八年から現在のラジオ体操がはじまるなど、国民の意識に定着していきます。ラジオ体操は、逓信省簡易保険局が「老幼男女の別なく家庭内にて日課的に体操をする習慣を作るのが国民保険上必要である」として、制定したものです。一月一日午前七時御大典記念としてNHKが放送を開始し、一九二九年二月一日の紀元節から「国民保険体操」として全国放送されました。それは、一九二五年三月にアメリカのメトロポリタン生命保険会社が健康増進・衛生思想啓蒙の広告放送として実施したのを取り入れたものです。

朝日新聞社は、こうした動きを受け、一九三〇年に「日本一の桃太郎を探す」企画を実施します。この企画は、一九三〇年二月現在の五年生在学中の児童を対象に「学力」「体力」「操行」の優れた者を表彰するものです。文部省が後援し、五月五日端午の節句に選ばれた児童と父母、在学校長は東京での表彰式後に東郷平八郎元帥を表敬訪問し、励まされたそうです。翌三一年からは四月現在の六年在学中の児童への「健康国策」と位置づけられ、「強い兵隊さん」への道をめざします。この桃太郎さんがしは、学校、地域の競争心を刺激し、全国的な狂騒の渦をまきおこしました。この「健康優良児」競争は、「強い兵隊」さがしから、戦後は「食糧事情改善」をかかげたものとなり、一月三日文化の日の行事として実施されます。ついで一九七八年には身体、体重が平均以上で、学習・運動能力

が良い者という個人単位から学校単位の「日本健康推進学校表彰」となり、九六年に学校単位が廃止されるまで続きます。

このように健康という価値は、女性の健康・生命に資するのが化粧品だとした、資生堂なる名称にもうかがえます。美は健康なりという資生堂のキャンペーンはここに始まっていく。また雑誌『主婦の友』では「衛生問答」などが人気を博します。日本人は、このように国民の体力づくり、健康への関心を促されていくなかで、その身体に対する感覚が違ってきたのです。この健康・衛生への信奉こそは、それから逸脱したもので、現在でいえば喫煙者などに向ける異様なまでの白眼視が象徴的ですが、ある種の心身の「奇形」を排除する論理を支えてきたものでもあります。

想うに身体の近代をめぐる言説は、日本の場合、その担い手を新しい国家の民につくりかえるという使命感にうながされ、良き兵隊の育成、産業社会で働ける良き労働者たる産業戦士、組織的な活力に満ちた者をつくることをめざしたため、当然に「健康体」とみなせない者を「奇形」となし、社会の「はみ出し者」として排除し、差別してきたのです。ですから、排除された者たちの眼から見たとき、健康だとか衛生として説かれた価値というのは何なのかということ、確りと見つめ直さなければなりません。ある国家の造型からはみ出た者を異端視する、排除していくことを自明とした論理を問い質さねばならないのではないのでしょうか。この課題を頭に置きながら、近代の歴史を読み直すと、衛生とか健康などという概念が人々の価値を高めていく一方で、人々の心を閉ざしてきた世界であったのではないかということを考えてみるのが現在まさに求められているのではないのでしょうか。

(国立公文書館特別参)